

女を「周旋」すること

—『それから』と『心』の場合—

宮本 陽子

一 「周旋」好きの男たち

漱石の主人公たちは「周旋」することが好きなようだ。『それから』の主人公代助は学生時代、蒼沼とその妹三千代と親しくしていたが、親友の平岡に三千代を「周旋」する。『心』の「先生」は、「子供の時から仲好」(心下十、255^①)であった。「K」を「強いて」、「私の宅(下宿)へ引張つて」(心下二十四、274)来る。『心』では「周旋」という言葉は使っていないものの、「騒々しい下宿」(心下十、224)に「多少神経衰弱に罹つてゐた」らしい「K」を残してきた「先生」が、「奥さん」と「お嬢さん」のいる住み心地のよい下宿に「K」を連れてくることは、文字通り、下宿の「周旋」であり、また下宿先で「奥さんとお嬢さんに、成るべくKと話しをする様に頼み」(心下二十五、276―277)、「自分が中心になって、女二人と

Kとの連絡をはかる様に力め」(心下二十五、277)ることが「周旋」でなくて何であろうか。

「周旋」とは要するに「世話をすること。とりもちをすること。面倒をみること。斡旋」(『日本国語大辞典』第二版)の意であり、「献上」や「下賜」のように、与える者と受け取る者の間に上下関係は想定されていない。代助と平岡、「先生」と「K」は少なくとも客観的に見れば、古くから非常に親しい友人同士である。ところで、友情は同性の親友間に無条件に成立するものであるだろうか。そもそも、なぜ代助と「先生」は親友に、結婚相手や住居や団欒、親しい女性を「周旋」するのであるだろうか。

『それから』においては、「殆ど兄弟の様に親しく往来」(それから二、30^②)してきた平岡が、三年前に三千代を「貫ひたいと云ふ意志を」代助に「打ち明けた」のが事の発端であり、代助が「三千代を周旋しようと云ひ出した」(それから十六、48

1) お蔭で平岡は三千代と結婚したのであった。「相互の為に口にした凡ての言葉には、娯楽どころか、常に一種の犠牲を含んでゐると確信してゐた」(それから二、30-31) 代助と平岡は、「其犠牲を即座に払へば、娯楽の性質が、忽然苦痛に變ずるものである」と云ふ陳腐な事実にさへ氣づかず²にゐた」(それから二、31)。「平岡に接近してゐた時分」、「人の為に泣く事の好きな男であつた」(それから八、213) 代助は、そのとき、平岡の為に「泣いて」(それから十六、481) やつた。「代助と接近してゐた時分の平岡は、人に泣いて貰う事を喜ぶ人」(それから八、213) であつたので、代助の「周旋」の申し出を受け、彼の涙を見た平岡は、「其時程朋友を有難いと思つた事はなく、「嬉しくつて其晩は少しも寐られなかつた」(それから十六、481) と述べる。このように三年前の二人は絵に描いたような青春時代を謳歌し、お互いの友情を信じ合つていた。以後、物語が進むにつれて二人の距離が拡がるとはいへ、少なくとも京阪地方に移る平岡夫妻の見送りに行つた代助が、平岡の眼鏡の裏に「得意の色が羨ましい位動いた」のを見て、「急に此友達を憎らしく思」(それから二、31 傍点強調は宮本) う瞬間までは、代助は三千代とよりも平岡と強い友情で結ばれていたはずである。帰京してからもなお、三千代が初めて代助の家を訪ねるとき、結婚祝いに代助から贈られた指輪を嵌めているが、この指輪も代助にとつては依然としてむしろ平岡との友情

を記念する思い出の品である³。指輪を見た代助は、「一つ店で別々の品物を買つた後、平岡と連れ立つて其処の敷居を跨ぎながら互いに顔を見合せて笑つた」(それから四、98-99、傍点強調は宮本) ことを思い出す。指輪を与えた相手である三千代の姿に思いを馳せることはない。資産もなく、「あまり出来の可い方ぢやなかつた」(それから三、65) 平岡よりも、資産家の次男で、「学校の成績も可なりだつた」(それから三、64) 代助は平岡に対して何の引け目もなく、後に平岡を前にして主張するように「僕は君より前から三千代さんを愛してゐた」(それから十六、482) というのが本当であるならば、平岡に三千代を「周旋」する必然性はなかつたはずである。しかし、すでに拙論「再現の昔」⁴ で述べたように、代助が平岡「より前から三千代」を「愛してゐた」とはテキストは語っていない。しかも同じ論文に書いたように、代助は自分に対する三千代の愛情、彼を三千代の夫にしたいと望んでいた三千代の兄菅沼の希望に氣づいていたはずである⁵。それならば、なぜ代助は菅沼兄妹の期待を裏切つてまで、平岡に三千代を「周旋」したのか。三千代の兄が代助を選んだことから推察されるように、経済的にも学業上も平岡より上であり、おそらくは容姿も優れていたと思われる代助は、結婚相手としてより好ましい青年であつたはずだ。彼の「周旋」は美しい友情の発露であろうか。いわゆる男のロマンとでも言うべきものであろうか。

一方、『心』の「先生」も代助に負けず裕福であり「金に不由のない」(心下十、224)学生時代を送っていた。さらに代助とは違って、「先生」は三十歳を過ぎてもお自ら稼ぐ必要はなく、そうしようと思えばいつまでも財産だけで不自由なく暮らし続けることができたはずである。学生時代の親友「K」も「真宗の坊さんの子」で貧しくはなかったが、「次男」だったので「可なりな財産家」である(心下十九、256)。「医者」の養子になっていた。ところが、「K」を「医者にする積で東京に出した」(心下二〇、257)この養家の意志を裏切って、彼が「私(先生)と同じ科へ入学し」(心下二十、259)たことから学資の送付を止められてしまう。

実家からの援助も期待できない「K」のために、「先生」は「K」の拒絶を無視して「二人前の食料を」「K」の「知らない間にそつと奥さんの手に渡さうとした」(心下二十三、271)り、「K」の実家と養家に対し「双方を融和するために手紙を書」(心下二十一、264-265)き、さらに「K」の義兄宛に「万一の場合には私(先生)が何うでもするから、安心するやうにといふ意味を強い言葉で書き」(心下二十二、267)さえする。しかし「先生」は、経済力以外では圧倒的に「K」に負けていて、「平生から何をしても及ばない自覚があつた」(心下二十四、273-274)。「先生」自身の表現によれば、「私より脊の高い」(心下四十二、336-337)「K」は、「容貌

も(私より)女に好かれるように見え」、「性質も私のようにこせ／＼していなあない所が、異性に気に入るだらうと思はれ」、「何処か間が抜けてゐて、それで何処かに確しかりした男らしい所のある点も、私よりは優勢に見え」(心下二十九、292-293)、要するに「先生」よりもはるかに優れた友人であった(と先生は考えている)。それではなぜ、「先生」は「K」に「奥さん」の家を「周旋」しなければならなかったのだろうか。「騒々しい下宿を出て」(心下十、224)、まるでその家の「主人のやう」(心下十六、246)に大切にされ、「三人連で日本橋に出掛け」(心下十七、251)て一緒に夕飯を食べて帰る「先生」の日々は、それこそ「擬似的な「家族」関係」⁽⁶⁾の実践となっており、「奥さん」の言うとおり、「そんな人を連れて来る」(心下二十三、270)必然性はまったくなかったはずだ。平岡が代助に頼んだのとは違い、「K」が「先生」に頼んだわけでもなく、むしろ拒否しようとする「K」を「先生」が「彼の剛情を折り曲げるために、彼の前に跪まづく事を敢へてし」(心下十三、269)て、連れて来たのだ。なぜそうまでして、「先生」は「K」に自分の下宿を「周旋」したのだろうか。

代助が頼まれ、「先生」が頼むように行つた違いはあるものの、この「周旋」好きの親切な男たちはいづれも自発的な意志で親友に対して「周旋」を行っている。そしていずれの場合も「周旋」が物語の発端となり、「周旋」した者とされた者双方

の運命を変えてゆく。本稿では、この二つの小説における「周旋」の意味を探りたい。

二 友情と恋愛

「先生」の遺書を一読すると、「K」の苦勞を見かねた「先生」が、親切心から「K」を連れてきたかのように書かれている。

「K」に無理をしないように忠告を与えると、「たゞ学問をするのが自分の目的ではない、(……)意志の力を養つて強い人になるのが自分の考えだ、(……)それには成るべく窮屈な境遇にあなくてはならない」(心下二十三、268-269)と「K」は主張する。しかし「先生」の見るところ、「意志はちつとも強くなつてゐない」どころか「神経衰弱に罹つてゐる位なの」(心下二十四、269)であった。そのため、「先生」は「Kと一所に住んで、一所に向上の路を辿つて行きたいと発議し」て、「K」を説得する。「先生」は「彼の剛情を折り曲げるために、彼の前に跪まづ・く・事を取へてした」(心下二十三、269)傍点強調は宮本)のだ。この「敢へて」という一語が、「先生」の発議も「跪まづ・く」という行為も、本心からではなく、ひたすら「K」の為を思つての行動であるということを暴いている。頑固な「K」を説得するために「敢へて」「跪づいて」見せる、この見せかけの行為は注釈者の解説とは逆に、むしろ「先生」の「K」に対

する余裕、優位性を保証するものはないだろうか。

「先生」はさらに、「そんな人を連れて来るのは、私(先生)の為に悪いから止せ」(心下二十三、270)と反対する「奥さん」に「K」の苦勞を物語り、「溺れか、つた人を抱いて、自分の熱を向ふに移してやる覚悟で、Kを引き取るのだと告げ(……)、其積であた、かい面倒を見て遣つて呉れと、奥さんにもお嬢さんにも頼」(心下二十三、271)んだのであった。

「お嬢さん」に対しては決して積極的な態度を見せない「先生」の「K」に対するこのときの熱意は注目に値する。対する「K」の態度は、決して尽くし甲斐があるものとは思われない。「仏教の教義で養はれた」ために、「衣食住について兎角の贅沢をいふのを恰も不道德のやうに考へてゐる」「K」は「奥さん」と「お嬢さん」の親切にも、環境の好転にも「むつちりとした様子」を見せ、「たゞ一言悪くないと云つた丈で」(心下二十三、272)ある。しかし、「Kと私(先生)とが性格の上に於て、大分相違のある事は、長く交際つて来た私(先生)に能く解つてゐる」(心下二十四、273)たので、「先生」は「K」に対して呆れるほど寛大に「氷を日向へ出して溶かす工夫を」(心下二十三、273)するのだった。ここまでの「先生」の記述に従うなら、陰に回つてまで可愛げのない「K」のために尽力する「先生」はどこまでも友だち思いの人間であるかのようだ。これに対して「先生」の親切を素直に喜ぶことのできない「K」は

勉強ができるだけの幼稚な人物のように思われてくるほどである。それならば、なぜこのような偏狭で幼稚な人物「K」を「先生」は尊敬するのみならず、下宿に連れてこなければならなかったのであろうか。

先生は親切そうに言う、「私は（先生）は奥さんからさう云ふ風に取り扱はれた結果、段々快活になつてきたのです。それを自覚してゐたから、同じものを今度はKの上に応用しようと試みたのです」（心下二十四、273 傍点強調は宮本）。自分にとつて良かった経験を親友にもさせてやろうというのは珍しいことではない。「私（先生）の神経が此家庭に入つてから多少角が取れた如く、Kの心も此処に置けば何時か鎮まる事があるだろうと考へたのです」（心下二十四、273）。これまで「K」に遅れをとつていた「先生」が、今度は自分が先んじて経験したことを「K」に味わわせ、自分の幸福を分けてやろうとしているかのである。とりわけ、日常生活の苦勞に疲れ果てていたこのころの「K」は肉体的にも精神的にも自分が「非常に險悪な方向へむいて進んで行きながら、（……）気が付かずにゐる」（心下二十四、274）状態だったので、「先生」は「私の方が能く事理を弁へてゐると信じてゐました」（心下二十四、274）と述懐している。このときの「先生」はさながら「K」の養父のようである。「先生」が「K」を救つてやろうとするのは、

しかし、物理的な苦勞とそれに派生する精神的困窮からのみではない。

私（先生）は彼と喧嘩をする事は恐れてゐませんでしたけれども、私が孤独の感に堪へなかつた自分の境遇を顧みると、親友の彼を、同じ孤独の境遇に置くのは、私に取つて忍びない事でした。一步進んで、より孤独な境遇に突き落とすのは猶厭でした（心下二十四、276 傍点強調は宮本）。

「先生」は「K」の「孤独」に自身が抱えていたものと同一ののを見たのだ。「先生」は「二十歳にならない時分」に父母を「殆んど同時に」失い、「信じてゐた許りではなく、常に感謝の心をもつて」「ありがたいもの、やうに尊敬してゐる」（心下四、205）た叔父に裏切られ、父の残してくれた財産を横領されるために、残された自分の取り分をすべて換金し、故郷を捨てて東京に出て来た。「気分は国を立つ時既に厭世的になつてゐて、^{ひと}「他は頼りにならないものだといふ觀念が、其時骨の中迄染み込んでしまつたやうに思はれ」ていた「先生」は、彼の「敵視する叔父だの叔母だの、その他の親戚だのを、恰も人類の代表者の如く考へ出し」、「汽車に乗つてさへ隣のものを、様子を、それとなく注意し始め」、「たまに向ふから話し掛けられでもすると、猶の事警戒を加へたくな」（心下十二、231）るありさまであつた。下宿を出て、「奥さん」の家に住むようになってからも、この母娘を信用しない「先生」は「家のもの、様子を猫のや

うに観察しながら、黙つて机の前に坐り、「時々は彼等に対して気の毒だと思ふ程」、「油断のない注意を彼等の上に注いでゐた」(心下十二、232)のであり、「奥さん」と「お嬢さん」に囲まれて暮らす楽しさを知る以前は、「孤独」のどん底にいたといつてよい。そうして、自分が経験した「孤独」によって「K」を理解し、「奥さん」の心尽くしによって「段々快活になつてきた」二三歳の今、「先生」は「同じものをKにも応用しよう」というわけである。

しかしながら、この遺書を書いている「先生」三七歳の今が決して「快活」ではないことを忘れてはいけない。手記の著者である青年の「私」が「時々先生を訪問するやうになつた」(心上六、22)とき、「先生」は「私」に向つて何度も、「私は淋しい人間です」(心上十七、27、28)という言葉を繰返す。「私」が出入りし始めたころの「先生の交際の範囲は極めて狭」(心上十七、27)く、「世間が嫌ひ」で「人間が嫌ひ」な「先生」はやはり「奥さん」となつた静を苦しめている。「先生」の結婚後の「孤独」は当然、「K」の自殺を契機にするものであるが、学生時代の「先生」が「K」を招き入れた時期においても心から「快活」ではなかつたということを確認しておきたい。すなわち、「叔父さん」に裏切られる以前、母を失つた直後に「物を解きほどこいて見たり、又ぐる／＼廻して眺めたりする癖は、もう其時分から、私にはちやんと備はつてゐたのです」(心下十

三、202)、と書く「先生」はこの「癖」を終生捨て去ることができなかつたのである。

それではなぜ、手記の著者である青年「私」は人間不信の「先生」と親しく付き合ひ、「遺書」まで贈られるほどの信頼を勝ち得たのであろうか。端的に言うならば、青年の「私」には先生がいつまでも手放せないでいた、「物を解きほどこいて見たり、又ぐる／＼廻して眺めたりする癖」がなかつた、少なくともこうした見方で先生を眺めることがなかつたからである。この手記を書いている「私」は當時を思い出しながら次のように述べ

然し私は先生を研究する気で其宅へ出入りをするのではなかつた。(……)今考へると其時の私の態度は、私の生活のうちで寧ろと尊むべきもの、一つであつた。私は全くそのために先生と人間らしい温かい交際が出来たのだと思ふ。もし私の好奇心が幾分でも先生の心に向つて、研究的に働き掛けたなら、二人の間を繋ぐ同情の糸は、何の容赦もなく其時ふつりと切れて仕舞つたらう。(……)先生はそれだけでなく、冷たい眼で研究されるのを絶えず恐れてゐたのである(心上七、26傍点強調は宮本)。

ここにおける「同情」というのは底本の註にもある通り、「二人の心が通ひあつてゐること」(心上七、26)に他ならない。英

語なら《sympathy》と言うものであろう。学生時代の「先生」と「K」の間にこの「同情の糸」があったと言えようか。「K」に対する先生の心遣いは《sympathy》ではなく、《gentleness》、あるいは度を越した《gentleness》であったはずだ。後者は「心が通いあう」ところまで行かず、態度が穏やかで親切なだけであり、馬など動物の態度にまで使う表現である。心がこもっていないとも良い、「冷たい眼で研究」しながらでも可能な態度である。これはすなわち、「先生」が「K」を始め「奥さん」や「お嬢さん」、人間全体に対して取り続けてきた態度である。『自分で自分が信用出来ないから、人も信用できないやうになつてゐるのです』（心上十四、51）と言う先生が若い「私」に心を開いたのは、青年が全身全霊を挙げて彼を慕っているからである。「冷か過ぎる」「頭」ではなく「胸」に「影響を与へ」られている青年は書く、「肉のなかに先生の力が喰ひ込んでゐると云つても、血のなかに先生の命が流れてゐると云つても、其時の私には少しも誇張ではないやうに思はれた」（心上二十三、82）。こうした「私」が「先生」の思想を理解するために、過去を話してくれるようにせがむと、「先生」は念を押すように言う、『あなたは疑うには余りに単純すぎる様だ。私は死ぬ前にたつた一人で好いから、他を信用して死にたいと思つてゐる。あなたは其たつた一人になれますか。なつて呉れますか。あなたは腹の底から真面目ですか』（心上三十二、111 傍点強調は宮本）。

後日、「先生」は遺書を委ねる理由を次のように書く。

私は其時心のうちで、始めて貴方を尊敬した。あなたが無遠慮に私の腹の中から、或生きたものを捕まへようといふ決心を見せたからです。私の心臓を立割つて、温かく流れる血潮を啜らうとしたからです（心下三、199）。

ここで「先生」は初めて、自分の胸の内を相手に明かすという態度を見せた。「先生」はさらに、「私（先生）は今自分で自分の心臓を破つて、其血をあなたの顔に浴びせかけようとしてゐるのです。私の鼓動が停まつた時、あなたの胸に新しい命が宿る事ができるなら満足です」（心下三、199）と結ぶ。自らの血を受け継いでもらおうとする父親のような態度である。

「先生」という呼称からも明白なように、青年は「先生」を敬愛している。論文の相談に来る、若くて「余りに単純すぎる」青年は先生の親友でもないしライヴァルでもない。父の病気で突然帰郷しなければなくなったために旅費を借りに来たり、すでに死んでしまった「先生」に手紙で就職の「周旋」を依頼したりする青年はやがて「先生」を乗り越える存在に成長するとしても、⁽¹²⁾「先生」が「冷たい眼で研究」する対象ではない。

青年が「先生」と結んだ関係と、「先生」が「K」と結んだ関係は比較にならない。「先生」がどれだけ「K」を「畏敬」しようとも、「其血を顔に浴びせかけ」、彼の「鼓動が停まつた時」

「先生」の「胸に新しい命が宿る事」を「K」は望んだりはしない。「小さなナイフで頸動脈を切つて一息に死んで仕舞つた」
 「K」は「彼の頸筋から一度に迸つた」血潮で唐紙を染め、「人間の血の勢といふもの、劇し」（心下五十、365）まで「先生」を驚かすだけである。「先生」に生きた血を与えようとするのではない。それは「先生」がその過大な親切にも拘らず、彼を「冷たい眼で研究」していただけたからである。

「先生」が「K」を下宿に連れてきたのは、「無遠慮に」「K」の「腹の中から、或生きたものを捕まへようといふ」つもりもなければ、彼「心臓を立割つて、温かく流れる血潮を啜らう」というつもりもなく、ただひたすら、研究対象としての「K」を自分の傍に置いてじつくりと「解きほどこいて見たり、又ぐる／＼廻して眺めたりする」ためであつた。向上心の強い「先生」は、「常に精進といふ言葉を使ひ」、その「行為動作」が「悉くこの精進の一語で形容されるやうに（……）見えた」ので、「心のうちで常に畏敬してゐ」（心下十九、257）た「K」を手放すわけには行かなかつたのだ。「先生」と「K」の違いは、単に「K」の方が優秀であるだけではない。「K」の方が自分で自分の運命を決めているように見えることである。小森陽一はこの二人を比較しながら、「先生」と「K」は、同郷者であると同時に故郷遺棄者であつた。しかし、「先生」が「血」の論理に基づく信頼関係を裏切られた存在であるのに対し、「K」は「道」

のために自らそれを裏切つていたのである。その意味では「K」の方が、より主体的に「自由と独立と己れとに充ちた現代」（上―十四）の論理を選びとつていたといえる。それはまた近代資本主義のもとでの都市生活者の論理でもある。そんな「K」とは異なり、「先生」は、この新しい論理に「淋しさ」を感じていたのである⁽¹³⁾、と弁別している。「K」のこうした無鉄砲とも言ふべき恐れ知らずの勇氣に若い「先生」は惹かれたのであろう。そうして「先生」はより強く、より「主体的」な「K」になりたい自分を重ねさせたであろう。後年、明治天皇崩御の際に「明治の精神」が終わった後も生きてゐるのを「時勢遅れだといふ感じが烈しく私（先生）の胸を打ちました」（心下五十五、三八四）と記し、その約一月後、「死ぬ機会を待つてゐたらしい」乃木大将の殉死に心を動かされ、「自殺する決心をした」（心下五十六、386）と書く「先生」は、「同情の糸」で結ばれていない人間の行為であつても、自らの生死を決めるための参考にする人物である。だからなおさら、自分の傍らにいる「K」を手本のように観察したに違いない。そうしながらも、「先生」は「K」の生き方から「感じていた」「淋しさ」を「K」に訴えることはできなかった。「K」の「孤独」と心で関わるこゝとができなかつた。「K」は「先生」の使う「人間らしい」という言葉のうちに、「自分の弱点の凡てを隠してゐる」（心下三十一、297）とさえ非難するのであつたから。こうした言葉に

耳を傾ける力が「K」に備わっていたのであれば、「切ない恋」(心下三十六、316)を身に覚え、「心でそれを止める丈の覚悟」(心下四十二、337)がないことを恥じて自殺する必要もなかったはずだ。こうした言葉によって「K」の「心臓を動か」(心上十九、67)す力が「先生」になれば、せめてそうするところが「先生」の本意であれば、最終的な悲劇は回避できたであろう。

潔癖な「先生」は、「お嬢さん」と出会って間もないころ、「殆ど信仰に近い愛を有てゐた」(心下十五、239-240)と述べる。このとき、「先生」は自分の「愛」について奇妙な分析をする。

もし愛といふ不思議なものに両極端があつて、其高い端には神聖な感じが働いて、低い端には性慾が動いてゐるとすれば、私の愛はたしかに其高い極端を捕まへたものです。私はもとより人間として肉を離れる事の出来ない身体でした。けれども御嬢さんを見る私の眼や、御嬢さんを考へる私の心は、全く肉の臭を帯びてみませんでした(心下十五、240 傍点強調は宮本)。

このように自分の愛、欲望についてさえ上下、高低を分別する「先生」にとつて、偶然に左右されることなく自分の意志で「道」を選び切り開いてゆく「K」は眩しい存在であったはずだ。二人がより高い所に向つて競いながら進んでゆくことを自負し

ていたからこそ、「精神的に向上心のないものは馬鹿だ」(心下三十一、297)(心下四十一、333)という同じセリフが二人の間で文字通り殺し文句として投げ交わされるのである。この言葉を最初に口にしたのは「K」であったが、後日、それを丸ごとそのまま凶器として投げ返した「先生」は「K」の構築した価値観の外にでることができなかつたのである。

青年が「先生」と付き合い始めたころ、「先生」は問う、「君、私は君の眼に何う映りますかね。強い人に見えますか、弱い人に見えますか」。青年は以外な返答をする、「中位に見えます」(心上十、36)。すべてに最上と最低しかないと思つてきた「先生」は青年に見事にかわされる。「先生」と「K」は中間項というものが決定的に欠如した二元論的な殆んど同一の苦しい価値観の中で、「一所に向上の路を辿て行」くために切磋琢磨競い合つていたのである。だからこそ、「先生」は「K」を「騒々しい下宿」に残しておくことができず、「強ひて」呼び寄せ、傍に置き「一所に住んで」、「冷たい眼で研究」しなければならなかつたのだ。彼ら二人の間には結婚後の静「奥さん」と青年の間之交わされる「心臓を動か」(心上十九、67)すような会話とは不可能であり、「同情の糸」が結ぶことも有り得なかつたのである。

とはいえ「先生」は「K」を観察し、最終的に「彼(K)の

保管してゐる要塞の地図を受取つて、彼の眼の前でゆつくりそれを眺め、「彼の虚に付け込」(心下四十一、332-333)むためだけに「K」と「一所に住ん」だのではない。むしろより大きな目的のために、「先生」は「K」と「一所に住ん」だのだ。親友の平岡の眼鏡の裏に「得意の色が羨ましい位動く」のを見る以前の代助が、三千代から愛されていることをほぼ確信していながら、彼女に関心がなかったのとは違い、「先生」は「K」がやってくる以前から「お嬢さん」を好きだった。「先生」が彼女に対して「全く肉の臭を帯びてゐ」ない「殆ど信仰に近い愛を有てゐた」(心下十五、239-240)ことはすでに見たとおりであるが、だからといって「先生」は自分の気持を行爲動作に表したことはなく、相手の気持はもちろん、自身の気持すらも確信していたわけではなかった。「K」に対する執着と比べるといささか熱意が足りないように思われるが、それでも「金に対して人類を疑ぐつたけれども、愛に対しては、まだ人類を疑はなかつた」(心下十二、233)「先生」は「御嬢さんの下手な活花を(……)嬉しがつて眺め」、「同じく下手な其の人の琴を(……)喜んで聞く」(心下十二、232)程度には彼女を好きであった。

ところが、「何かにつけて、私(先生)の国元の事情を知りたがる」(心下十五、242)「奥さん」に対して、「付図奥さんが、叔父さんと同じやうな意味で、お嬢さんを私(先生)に接近さ

せようと力めるのではないかと考え出し」(心下十五、243)、心を許すことができない。それでも「お嬢さん」に惹かれていた「先生」は「思ひ切つてお嬢さんを貰ひ受ける話をして見ようかと決心した事が(……)何度となくあり」(心下十六、247-248)、「奥さん」の方も「お嬢さん」と一緒に「先生」を日本橋へ買物に誘い、それを見かけた友人に「先生」が「何時妻を迎へたのか」(心下十七、251-252)とからかわれた話を聞き、娘の母親として喜ぶのである。このとき、「先生」は「奥さん」に「自分の考へてゐる通りを直截に打ち明けて仕舞へば好かつたかも知れ」ないのに、「狐疑といふ薩張りしない塊がこびり付いてゐ」たために、「話の角度を故意に少し外らし」、「肝心の自分といふものを問題の中から引き抜いて、(……)お嬢さんの結婚について、奥さんの意中を探」(心下十八、252)る。そうして、「先生」は「お嬢さん」の結婚について「色々な知識を奥さんから得たやうな気がした」代わりに、「自分に就いて、ついに一言も口を開く事が出来」ないまま、「機会を逸したと同様の結果に陥つてしま」(心下十八、253)う。

「先生」がこうした煮え切らない態度で「お嬢さん」の結婚について「奥さん」の意向を探っている間、「お嬢さん」は「何時の間にか向ふの隅に行つて、脊中を此方に向け」(心下十八、253)、「昨日「先生」が日本橋で「お嬢さん」に買ってやつた

反物を戸棚から「引き出して膝の上に置いて眺めてゐる」(心下十八、253)る。「後姿だけで人間の心が読める筈はありません」(心下十八、253)、と「先生」は述懐する。これについて、石原千秋は、「私(先生)の着物も御嬢さんのも同じ戸棚の隅に重ねてあった」(心下十八、253)という記述を引きながら、「これが、結婚問題についてのお嬢さんの答え」⁽¹⁴⁾であり、「見当が付」(心下十八、253) かなかつたこそ、「先生はお嬢さんの仕種を注視したはず」であるのに、その結果、「お嬢さんの気持がわかつたことについては一切語らない語りの巧妙さを指摘しているが、⁽¹⁵⁾「先生」は執拗に気づかない態度を取り続ける。すなわち、「何も云はずに席を立ち掛け」たところを、「急に改まつた調子になつた」⁽¹⁶⁾「奥さん」から、「何う思ふか」と訊ねられる。「先生」はわかつていないことを強調するかのようになり、「奥さん」の質問について、「その聞き方は何をどふ思ふのかと反問しなければ解らない程不意でした」(心下十八、253 傍点強調は宮本)、と畳みかける。読者には「奥さん」とそれ以上に「お嬢さん」の期待している答えが明白であるのに、「先生」はこの質問に対して、「成るべく緩くならな方が可いであらう」(心下十八、253)、という肩透かしを食わせる。

石原千秋は、このときの応答について、「先生は、奥さんの言葉を「娘をどう思うか」と聞いてしまったからこそ、一瞬理解が遅れたのに違いありません」と述べた後、「この一瞬に、先生

とお嬢さんとの「恋」を三人が共有したのだと判断する。そこから「奥さんとお嬢さんと私の関係が斯うなつてゐる所へ」(心下十八、254)、「そんな人を連れて来るのは、私の為にならないから止せ」(心二十三、270)と言つて止めようとする奥さんを押し切つてまで、「K」を連れてきた「先生」の意図は明らかだ、と石原は明快に結論する。⁽¹⁶⁾この結論に異議を唱えようという気はない。しかし、わたしにとつてより気になるのは、この「共有」が当事者である人物間の発話として明文化されないことである。つまり、彼らにはこの「共有」の確認ができていない。そのために、「お嬢さん」は「先生」の嫉妬をことさらに掻きたて、煩悶した「先生」は「K」を追い詰めることになるのだ。

「先生」が「K」に「奥さん」の家に下宿することを「周旋」した目的は、「K」を「研究」することの他に、石原の指摘どおり、「三人が共有」しているらしい「恋」を見せつけるということとを忘れることはできない。初対面の青年から「美しい奥さんであつた」(心上四、18)と言われる「先生」の「奥さん」静、初対面の「先生」が「御嬢さんの顔を見た瞬間に、(……)私の頭の中へ今迄想像も及ばなかつた異性の匂が新しく入つて来ました」(心下十一、229)というほどに魅力的な「お嬢さん」静、あるいは「其人に対して、殆ど信仰に近い愛を有つてゐた」(心下十五、239-240)という表現を「先生」から

引き出す静、日本橋で三人で買物をしているところを目撃した級友が「私（先生）の細君（お嬢さん）は非常に美人だといって賞める」（心下十七、251）ほど美しい静、母親である「奥さん」も「お嬢さんの容色には大分重きを置いてゐるらしく見えた」（心下十八、253）という美貌の静に憎からず思われているのを、「平生から何をしても及ばない」Kに見せびらかすことほど「先生」の虚栄心を満足させることはなかったはずである。「先生」の最終的な目的は「K」に勝つことなのだから。けれどもじつさい、「先生」には「お嬢さん」から愛されているという確信があっただろうか。また「お嬢さん」も「先生」から愛されているという自信があっただろうか。「先生」は「K」という第三者を媒介にすることで、自分の恋を鼓舞しようとしたのではないだろうか。

何事にも懐疑的な「先生」は、「K」が傍にいて初めて自分の「お嬢さん」への恋を確信したように思われる。ルネ・ジラー⁽¹⁷⁾を引くまでもなく、媒介の介在は欲望に活を入れる。「先生」は自分の「お嬢さん」への覚束ない愛の行く末を明確にするために「K」という媒介を導入したのだ。「K」の死後、「先生」は書く、「かういふ嫉妬は愛の反面ぢやないでせうか。私は結婚してから、此感情がだん／＼薄らいで行くのを自覚しました。其代り愛情の方も決して元のやうに猛烈ではないのです」（心下三十四、309）。「嫉妬」を知る前の「先生」は「愛情」も

はつきりと自覚することができなかった。「先生」のこうした曖昧で不愉快な自己中心的態度は結婚後も静を苦しめるようになるだろう。

「K」が来る以前の「先生」は「お嬢さん」をきちんと見ることさえなかったのではないか。「お嬢さん」は「若い女に共通な」（心下二十七、282）「私の嫌ひな例の笑ひ方をする」（心下三十四、308）をするが、そうした「嫌いな所は、Kが宅へ来てから、始めて私の眼に着き出したのです」（心下三十四、309 傍点強調は宮本）、と「先生」は遺書に書く。「先生」の「お嬢さん」に対する気持は、この家に移った最初の日に、「其室の床に活けられた花と其横に立て懸けられた琴を見て、「其めいた趣味を子供のうちから有つてゐた」がゆえに「斯ういふ艶めかしい装飾を何時の間にか軽蔑する癖が付いてゐた」「先生」が、当初はその「趣味」を断罪したにも拘らず、「御嬢さんの顔を見た瞬間に、「今迄想像も及ばなかつた異性の匂」を嗅ぎ、「それから床の正面に活けてある花が厭でなくなり」、「同じ床に立て懸けてある琴も邪魔にならなく」（心下十一、229 - 230）なつた時点からほとんど発展していなかつたのではないか。「其人に対して、殆ど信仰に近い愛を有つてゐた」（心下十五、239 - 240）とはいえ、恋とは呼べないものであつたのではないか。「其時お嬢さんの事で多少夢中になつてゐ」（心下二十五、279 傍点強調は宮本）た程度でしかない。つま

り、自身が「奥さん」と「お嬢さん」の結婚相手の対象として目されていることを意識しつつ、また自らも結婚したいと願ひこそすれ、恋という切実な気持を、例えばKがその「重々しい口から」「打ち明け」たような「切ない恋」(心下三十六、316)を、「K」が来る以前の「先生」が胸に抱いていたとは思われない。少なくとも、思いを言葉にすることによって、身に降りかかるであろう責任を取ることを潔しとするには至っていないかった。

このように「先生」と「お嬢さん」の関係についての三人の共有が曖昧模糊としている状態のときに、「孤独」で「鈍い人」「K」がやって来る。「奥さん」や「お嬢さん」にはまったく意思表示をする勇氣のない「先生」は、不思議なほどに「K」を警戒していなかった。「私(先生)の方が能く事理を弁へてゐると信じてゐた」(心下二十四、274)し、さらに「Kには元来さういふ点(男女関係)にかけると鈍い人なので、「私(先生)には最初からKなら大丈夫といふ安心があつた」(心下二十八、290)というのだ。「先生」は、「神経衰弱」に陥っている「K」のために「奥さんとお嬢さんに、成るべくKと話しをする様に頼み」、「自分が中心になつて、女二人とKとの連絡をはかる様に力め」(心下二十五、275-277)る。さらに、「彼(K)を人間らしくする第一の手段として、まづ異性の傍に彼を坐らせる方法を講じ(……)、さうして其処から出る空気に彼を

曝した上、錆付きか、つた彼の血液を新しくしようと試みたの」(心下二十五、278傍点強調は宮本)だった。「先生」は自分が美しい「お嬢さん」を「K」に誇示し、さらに「お嬢さん」に対する自らの思いを第三者の存在を梃に鼓舞しよう目論んでいるはずなのに、自ら進んで彼女の傍に「K」を座らせ、「K」の女性に対する鈍感さに非常な信頼を置いている。否、そうすることで自身の気持を刺激しようとしたと言ふべきかもしれない。

当初は「先生」の「周旋」をむしろ「軽蔑して」いた「K」であつたが、それでも次第に「自分以外に世界のある事を少しづつ、悟つて行くやうで」、「ある日私(先生)に向つて、女はさう軽蔑すべきものではないと云ふやうな事を云ふ」(心下二十五、279)ようになる。さらに、「奥さんがお嬢さんと私だけを置き去りにして、宅を空けた例はまだなかつた」にも拘らず、「Kとお嬢さん丈」が「家に残つてゐる」ことがあるのを「先生」は発見する(心下二十七、282)。しかし、「K」に対する「先生」の嫉妬が顕在化するのには、奇妙にも「お嬢さん」が不在の場所においてである。夏休みに入り、「先生」は房州への旅行を計画し、「K」を誘うが「あまり旅に出ない男」(心下二十八、287)であつた「K」は乗り気でない。それでも「K一人を此処に残してゆく気になれない」(心下二十八、286)

「先生」は何とか「K」を旅行に連れ出すことに成功する。こうして実際に二人で房州に上陸すると、「先生」は「すぐ厭にな」(心下二十八、287)る。そうして那古の海岸に行き、「先生」は「よく書物をひろげ」るが、「Kは何もせずに黙って居る方が多」く、「先生」が「Kに何をしてゐるのだと聞」いても、「Kは何もしてゐないと一口答へる丈で」(心下二十八、288)ある。先生の意識に「お嬢さん」の不在が現れるのはこのときである。

私は自分の傍に斯うちつとして坐つてゐるものが、Kでなくつて、お嬢さんだつたら嘸愉快だらうと思ふ事が能くありました。それ丈ならまだ可いのですが、時にはKの方でも私と同じやうな希望を抱いて岩の上に坐つてゐるのではないかしらと忽然と疑ひ出すのです。(……)ある時私は突然彼の襟頸を後からぐいと攫みました。斯うして海の中に付き落したら何うすると云つてKに聞きました。Kは動きませんでした。後向の儘、丁度好い、遣つて呉れと答へました。私はすぐ首筋を押へた手を放しました(心下二十八、289)

Kを「異性の傍に坐らせる方法を講じ」た結果が、「自分(先生)の傍にちつと坐つてゐる」Kを見て、「お嬢さん」と挿げ替える空想をし、Kも自分と「同じやうな希望を抱いて坐つてゐるのではないかしらと疑ひ出す」に至るのは、非常に奇妙で皮

肉なことだ。ここに至つて、嫉妬を契機にすることで、「先生」は初めて不在の「お嬢さん」を強く慕う。そうして「先生」は「自分より落ち着いてゐるKを見て、羨ましがり(……)、又憎らしが」(心下二十八、289 傍点強調は宮本)るといふ始末である。

「羨望」、「憎悪」、「嫉妬」は手を繋ぎ、最後に「愛」を伴つてやつて来る四姉妹のようだ。後年、「先生」が「かういふ嫉妬は愛の反面ぢやないでせうか」と述べるようになるのはすでに指摘したとおりであるが、「嫉妬は愛の反面」ではなくて逆に「愛は嫉妬の反面」と言うべきであろう。

同様のことが、『それから』においても観察される。代助が、京阪地方へ発つ平岡の眼鏡の裏に「得意の色が羨ましい位動いた」のを見て、「急に此友達が憎らしく思」(それから二、31 傍点強調は宮本)うのと同様、「羨望」と「憎悪」はここでも主人公から親友に向けられ、そこに「嫉妬」が結びつく。「恋」が意識されるらしいのも同様だ。要するに「恋」の対象と主体だけでは「恋」が成立し得ないということである。これら二篇の小説で第三者の介在なしに「恋」をするのは、皮肉なことにいずれも相手から愛されることがなかったらしい平岡と「K」の二人だ。とりわけ「K」の場合は、「私(先生)のお嬢さんを愛してゐる素振に全く気がついてゐないやうな」さういふ点に

かけると鈍い人」(心下二十八、290 傍点強調は宮本)であったのに、だからこそ、「先生」のように「恋」の条件を必要とせずに「切ない恋」(心下三十六、316)を身に憶えたのだ。もちろん、自殺によって彼の恋は成就しなかったわけであるから、それが「嫉妬」を契機として燃え上がった「先生」の恋と同じようなものであるか不明のままである。

ところで、「私(先生)のお嬢さんを愛してゐる素振」を相手の「お嬢さん」が解読していたという確証もない。「奥さんとお嬢さんの言語動作を観察して、二人の心が果して其処に現れてゐる通りなのだらうかと疑つてもみました。さうして人間の胸の中に装置された複雑な器械が、時計の針のやうに、明瞭に偽りなく、盤上の数字を指し得るものだらうかと考へました」(心下三十九、326-327)と書く「先生」が「二人の心」をその「言語動作」から解読している自信がなかったように、「先生」の「言語動作」から「お嬢さんを愛してゐる」という意味が正しく解読されていたとは信じがたい。そもそも「先生」は正しく発信していたのだろうか。少なくとも、「先生」が「お嬢さんを愛してゐる」という情報が、「奥さん」や「お嬢さん」に共有されていたのなら、最初は「お嬢さんが凡て私の方が先にして、「K」を後廻しにするやうに見え、(……)私にだけ解るやうに、持前の親切を余分に私の方へ割り宛て、呉れた」ので「心の中でひそかに彼に対する凱歌を奏し」(心下三十二、30

1) ていた「先生」に対し、やがて「お嬢さん」が「Kの方ばかりへ行くように思われる事」(心下三十二、304)が起つたり、町で「K」と「お嬢さん」が「連れ立つて帰つ来」ところを「先生」がすれ違った日の夕食時に、「お嬢さん」から「何処へ行つたのか中^あて、見ろ」(心下三十四、308)と言われることもなかったであろう。「先生」の「言語動作」から「お嬢さんを愛してゐる」というメッセージが「お嬢さん」に伝達されていなかったことは明白である。「先生」の伝えるべきメッセージに初めて表現を与えたのが、「K」の「切ない恋」の告白であったと言わざるをえない。これを聞くことがなければ、「先生」は永遠に伝わることのない「言語動作」を繰り返し続けることしかなかった。

ところで、「先生」と「お嬢さん」、さらに「K」までも、誰一人として伝えるべき相手に「愛している」ということを言語表現で伝えた者はいない。「先生」に「切ない恋」を告白した「K」でさえ、自分の恋をどのような言葉で語つたのか定かではない。「心」において、「愛している」という表現を発話するためには手記の著者「私」一人であるが、これも自分の愛を語るためではない。

「愛している」といういささか翻訳体のような表現は、漱石の作品において珍しいものではない。『それから』の代助は三千代に問う、「三千代さん、正直に云つて御覧。貴方は平岡を愛して

るるんですか」、「では平岡は貴方を愛してゐるんですか」（それから十四、419）。彼はまた、平岡にも言うだろう、「君は三千代さんを愛してゐなかつた」、「僕は三千代さんを愛してゐる」（それから十六、479-480）、「僕は君より前から三千代さんを愛してゐたのだよ」（それから一六、482）。対する平岡も同じ表現を使う、「他の妻を愛する権利が君にあるのか」、「よし僕が君の期待する通り三千代を愛してゐなかつた事が事実としても」（それから十六、480）。『心』の青年「私」も「奥さん」に問う、「ぢや奥さんは先生を何の位愛してゐらしやるんですか」（二ころ上十七、61）。いずれの小説においても、愛する者がその対象者に対面して、「私はあなたを愛している」と発話する場面は生じない。愛し合う恋人同士が互いを愛していると伝え合うことはない。『それから』の代助は平岡に向つて、「三千代さんを呉れないか」（それから十六、484）と言う。『心』の先生は「Kが近頃何か云ひはしなかつたか奥さんに聞いて見」（心下四十四、346）した後で、「突然」、言う、「奥さん、お嬢さんを私に下さい」（心下四十五、346）。代助の方は三千代から「覚悟を極めませう」（それから十四、420）と言われて、平岡に頼みに行くことを彼女に告げてからのことであるので、相手の承諾の上であるが、『心』の「お嬢さん」は未成年のためか本人の意志が問われることがないままであった。いずれにしても決断の遅い主人公たちが結婚を申し込む先は相手で

はなくその所有者である。しかし時代性を考慮するなら、問題にするべきは申し込みの相手ではなく、彼らの決断の遅さ、優柔不断さの方であろう。

三 奪回すること

『それから』と『心』の出来事上の大きな違いは、前者においては、完全に媒介者の手中にあつた女性を主人公が奪い返すのに対して、後者においては、主人公の胸中でのみ媒介者による恋の告白が目前に迫っていただけで、媒介者の自死により主人公との競争が遂行されないことである。

『それから』はすでに書いたように、主人公の代助が自らの過去にロマンを創設し、現在の恋を構築してゆく物語であるが、⁽¹⁸⁾主人公が父親のモットーである「熱誠」を軽蔑し、常日頃、「熱誠な勢力を以てそれ（行為）を遂行する気になれ」ない人物であると自認していたので、⁽¹⁹⁾「天意には叶ふが、人の掟に背く恋」（それから十三、374）においても、まるで嫌々ながら遂行しているかのようなのである。

父の勧める結婚相手の令嬢と見合いをし、彼女を見送つた後、彼はいつそう三千代に対する愛情の深まりを覚える。しかしながら、「三千代に対する愛情は、此夫婦の現在の関係を、必須条件として募りつゝ、ある事もまた一方では否み切れなかつた」（そ

れから十三、347)。彼は、不幸だからこそ現在の三千代が好きなのだということを認めており、自分の愛情が無条件のものでないということを自覚している。そうして、平岡に家庭を顧みるように忠告してやろう、と三千代に約束したものの、実際に平岡を会った代助がやったことと言えば、「平岡夫婦を三年前の夫婦にして、それを便りに、自分を三千代から永く振り放さうとする最後の試みを、半ば無意識に遣った丈であ」(それから十三、364 傍点強調は宮本)る。代助の忠告を軽んじ、家庭を蔑ろにするのをやめようとしないう平岡を「悪く」り、「そんなに家庭が嫌ひなら、嫌ひでよし、其代り細君を奪ちまうぞと判然知らせた」(と思いつつも、「二人の間答は其処迄行くには、まだ中々間があ」(それから十三、365 傍点強調は宮本)るという具合に、中途半端な状態が保持される。決断する「最後の權威は自己にあるものと、腹のうちで定め」(それから十四、377) つつも、「掌に載せた賽を」 「早く運命が戸外から来て、其手を軽く敲いて呉れ、ば好いと思つた。が、一方では、まだ握つてゐられると云ふ意識が大層嬉しかつた」(それから十四、378 傍点強調は宮本) という消極的な態度である。彼は自分が決意を実行することを余儀なくされるように、他が自分を押し出してくれることを望んでいる。そのため、父への告白が先延ばしにされたとき、代助は「此次父に逢ふときは、もう一歩も後へ引けない様に、自分の方を拵へて置きたかつた」が、自

分で「拵へ」ることができないので、「三千代に遭つて己れを語つて置く必要が出来る」(それから十四、395) と考えるほどである。いかにも懦弱である。

それでは、代助がいちばん明るく喜びに満ちている場面はどこであろうか。それは彼が三千代に「紙の指輪」(それから十二、312)、すなわち紙幣を差し出した晩である。金銭のやり取りが二人の交際の口実となつてゐることはすでに別の論文で述べたことがあるが、三千代が必要としてゐるものを与えることが、代助にとつての喜びであり、愛の証となる。三千代が「御金の工面」(それから四、100) を代助に頼むたびに、明らかにされるのは平岡の放蕩であつたり、平岡夫婦の性生活の不在であつたりする。代助と三千代の間で金銭と性が交換されることはないが、代助は三千代に金銭を与えることで彼女が平岡に性的に所有されていないことを確認することができる。彼は自分が彼女を所有するために金銭を与えるのではなく、平岡の非所有、非存在の追認のために金銭を支払うのだ。彼が三年前に贈つた指輪を質に入れてしまつた三千代の裸の指に「紙の指輪」を嵌めてやることは、夫のものでないことを約束するエンゲージリングを与えることに他ならない。そのためこそ、三千代は「湯から出たての綺麗な細い指を、代助の前に広げて見せた」(それから十二、311) のである。

「紙の指輪」を受け取らせた代助は「美しい夢を見た様に、暗

い夜を切つて歩」き、すぐに自宅の門前に着くが、昂揚をした気分のまま「高い星を戴いて、静かな屋敷町をぐる／＼徘徊し」、それでもなお、「自分では、夜半迄歩きつゝけても疲れる事はなからうと思つた」(それから十二、313)ほどであり、帰宅後は「先刻栓を抜いた香水を取つて、括枕の上に一滴垂らした」が、「夫では何だか物足りなかつた」ので、「壘を持つた儘、立つて室の四隅へ行つて、そこに一二滴づゝ振りかけ」、「白地の浴衣に着換えて、新しい小搔巻の下に安らかな手足を横たへ」、「薔薇の香のする眠りに就いた」(それから十二、314)のであつた。初恋の少年と結婚した少女が、念願叶つて恋の一夜を過ごしたかのである。代助には珍しいこの恋の陶醉がむしろ三千代と別れたのちに、ただ一人で味わわれること、そしてこの喜びの源が、平岡の消去であることに注目したい。

父の勧める結婚の拒絶と三千代の獲得については歩みの遅い、優柔不断な代助であるが、しかし、思い出の中での平岡の消去はむしろすっきりとしたものだ。平岡夫妻が帰京して間もない時分に、彼が三千代を思い出す場合にはまだ平岡の姿がある。三千代の兄菅沼の家で初めて三千代に会つた経緯を想起しながら、「平岡も、代助の様に、よく菅沼の家は遊びに来た。あるときは二人連れ立つて、来た事もある。さうして、代助と前後して、三千代と懇意になつた。三千代は兄と此二人に食付いて、時々池之端杯を散歩した事がある。四人は此関係で約二年足ら

ず過ごした」(それから七、171)傍点強調は宮本)、と彼は述べ懐する。ここでは男性チームに女性が一人「食付い」た格好である。ところが、もう一度、代助が菅沼のことを思い出すときには平岡の姿が消去されている。三千代が百合の花を持って代助の家を訪れたときのことである。代助は思い出す、「三千代が来てから後、兄と代助は益々親しくなつた」(それから十四、409)。ここでは兄菅沼が妹についての「計画」を代助に打ち明け、代助が今になつて菅沼との「親密」さのなかに「一種の意味」すなわち、「やがて自分が三千代と結婚すること」を「認めない訳に行かな」く感ずる部分であるから当然かもしれない。

しかし、奇妙なのは、菅沼兄妹と代助の親密さの発展と菅沼の死による終局を語る部分からは平岡の存在がきれいに切り取られている。「三人は斯くして、巴の如くに回轉しつゝ、月から月へと進んで行つた。有意識か無意識か、巴の輪は回るに従つて次第に狭まつて来た。遂に三巴が一所に寄つて、丸い円にならうとする少し前の所で、忽然其一つが欠けた為め、残る二つは平衡を失つた」(それから十四、412)。この三角関係に「同性愛が隠されてい」と見る島田雅彦は、「代助が夢見たのは、三千代と、代助の親友でもあつた三千代の兄との幸福な三角関係に過ぎ」ず、「もとより、代助は三千代と一対一の恋愛関係を結ぶ気などなかつたのである。あくまで、代助の自意識と通底する自意識を持った同士が介在していなければ、三千代との関

係もあり得なかつた⁽²²⁾と書いているが、「代助の自意識と通底する自意識を持った同士」、すなわち菅沼こそが代助にとって大事なパートナーであり、その妹ではない。代助が「三千代と一対一の恋愛関係を結ぶ気などなかつた」ことについては間違いあるまい。ここにおいては平岡の排除＝三千代への事後的接近となつてゐることを確認しておきたい。

さて、島田の言う「同性愛」についてであるが、ここで、『ころ』の「先生」が手記の著者「私」に語る恋愛論を思い出したい。『恋は罪悪ですよ』という言葉を皮切りに「先生」の恋愛論が始まる。その理由が分からないという「私」に対して「先生」は『あなたの心はとつくの昔から既に恋で動いてゐるぢやありませんか』と言って、「私」を驚かす。「先生」は執拗である。納得しない「私」に、『あなたは物足りない結果私の所に動いて来たぢやありませんか』と主張し、『然しそれは恋とは違ひます』という「私」の返答を受けて言う、『恋に上る階段なんです。異性と抱き合う順序としてまづ同性の私の所へ動いて来たのです』（心上十三、46―47）。「先生」はやがて青年が彼の「奥さん」と結ばれることになるのを見越していたのであろうか。⁽²³⁾ 小森陽一が指摘しているように、⁽²⁴⁾ 「子供」の話題においても、「死」についての話題においても、「奥さん」は二人の会話を黙って聞いている青年の方を向いて発言する。「ねえあなた」と

「私の方を向」いた「奥さん」の「あなた」は「先生」ではなく「私」である。どちらが先に死ぬかについて話す場面においてはそれがいっそう強調されるだろう。「ねえあなた」と「奥さんはことさらに私の方を見て冗談らしく斯う云つた」（傍点強調は宮本）と念を入れて書かれている。

ここで再び石原千秋『ころ』大人になれなかつた先生』を見ると、ここには漱石のテキストから「上」の一から五まで、十六から二十まで、「下」の十七、十八、五十一から五十六までがピックアップされている。そして「上」の部分の最後（二十、34）の後に「下」の部分の始まり（十七、59）が続く形で配置されている。したがって、青年の「私」と「先生の「奥さん」のやり取りのすぐ後に、学生時代の「先生」と静の母である「奥さん」と「お嬢さん」静のやり取りが続く形になる。興味深いことに、そこで話題になつてゐるのはいずれも「着物」である。そこから、「先生」と「お嬢さん」（後に「奥さん」）の関係が「着物」の贈与と二人の「着物」の重ね合わせから出発するように、「私」と「奥さん」の関係もここに暗示されているかのよう、類似したモチーフが浮かび上がる。

若い独身者の「私」は「先生の宅へ出這りをする序に、衣服の洗ひ張や仕立方などを奥さんに頼ん」でいる。それを「子供のない奥さんは、さういふ世話を焼くのが却て退屈凌ぎになつて、結句身体の葉だ位の事を云つて」引き受けていた。若い青

年の着物は旧式の手織りなのでかたい。「奥さん」は言う、「こりや手織ね。こんな地の好い着物は今迄縫った事がないわ。其代わり縫ひ悪いのよそりあ。御蔭で針を二本折りましたわ」(心上二十、73)。「私」は男というよりもむしろ子供のようでもある。一方、「卒業して髭を生やす時代が来なければ、服装の心配などはするに及ばないといふ変な考へを有つてゐた」学生時代の「先生」は粗末な着物を着ていた。「田舎で織つた木綿ものしか有つてゐなかつた」「先生」が「書物ばかり買ふのを見て、奥さんは少し着物を拵へると云ひ」(心下十七、248-249)、「先生」と「お嬢さん」と一緒に日本橋まで連れてゆく。若い「先生」は「奥さん」の息子のようでも婿のようでもある。着物は持つていなくとも、お金のある「先生」は「お嬢さん」に着物を買つてやることになり、それを「お嬢さん」は「先生」の着物と「同じ戸棚の隅に重ねて」(心下十八、254)置くことになるだろう。

青年はやがて「先生」の「奥さん」と結ばれることになるよすがだが、じつさいのところ、青年の「心はとつくの昔から既に恋で動いてゐる」という「先生」の指摘における「恋」が「奥さん」への恋なのか、あるいは「異性と抱き合う」という表現における「異性」が果たして「奥さん」を想定しているのかは定かではない。しかし、ここで問題にしたいのは、「先生」と「私」の関係が「恋に上る階段」であり、異性を抱き合う順序と

してまづ同性の所へ来る」という興味深い言葉である。すなわち、「同性」抜きでは「恋」ができない、という指摘である。これはフロイトのいう男性が異性愛に至る過程と見事に一致しているし、少なくとも、『心』を読む限りは、「先生」の発言は間違ひではないようだ。より正確に言うなら、「まづ同性の所へ来る」というよりも、むしろ「まず同性を利用し、消去する」と言うべきかもしれない。さらに『それから』においても、「異性と抱き合う」ために、同性が利用されていると言えなくもないかもしれない。しかし、これら二つの小説において、「異性と抱き合う」ことが主人公の究極の目的となつているといえるだろうか。主人公たちはそれほど健全に生物学的本能を保持していると言えようか。むしろ、漱石のこの二編の小説においては、イヴ・セジウィツクがウイッチャリーの『田舎女房』について述べていることの方が的確であると思われる。すなわち、「この劇(『田舎女房』では男性が異性愛関係をもつのは男同士の究極的な絆を結ぶためである(……)。そしてこの絆がうまく結べた場合、「男性性」にキズがつくどころか、むしろそれがあって初めて「男性性」が確かなものになる⁽²⁵⁾」。

中山和子や島田雅彦を引くまでもなく、代助の三千代への愛情は非常に不確実で信頼に値しないものである。確実なのは、平岡への募る敵意である。学生時代は自分よりも劣っていたは

ずの平岡が、仕事のために妻を引き連れ意気揚々と京阪に移るというのが、同性同年齢の代助を刺激するのである。帰京後の平岡は代助の援助を期待しながらも、労働をしていないことについてはあからさまな批判をする。失業し、金銭的に逼迫している事態にあつては、先に社会で働いたことなど自慢にならないはずであるが、平岡はコンプレックスを糊塗するためであろうか、自分が先んじていることをいつまでも誇る。就職活動をするのさえ自慢である。そのくせ、代助に職の周旋を依頼し、金銭的に余裕があることに強い拘りを見せることを止めない。

平岡が帰京後、初めて代助の家を訪問したとき、座敷に通された平岡の開口一番の言葉は「おや、椅子だね」（それから二、26）というものである。底本の注釈を見るまでもなく、当時はまだ珍しい椅子が置かれていることを発見した平岡は、洋風生活のできる代助に羨望を感じたらしい。「十五貫目以上もあらうと云ふわが肉に、三文の価値を置いてゐない様は扱ひ方に見えた」と記述されているが、こうした巨体で椅子に「どざりと身体を投げ掛ける」（それから二、26）ことは、半ば嫌がらせと言つてもよいだろう。彼は「椅子の脊に坊主頭を靠たして、一寸部屋の中を見廻しながら、『中々、好い部屋だね。思ったより好い』」（それから二、26 傍点強調は宮本）、と発言するが、これは「良いご身分だね」と読み替えるべきであろう。さらに、底本の注釈者は平岡の「坊主頭」について「御洒落」な代助が

「髪を分け」ていることと対比させているが、こうした差異は「自分の顔を鏡で見る余裕がある」（それから六、161）代助に対する平岡の批判に連動してゆく。この最初の訪問において「話の具合が何だか故の様にしんみりしない」（それから二、28）のは当然である。しかし、この不協和音はこのときに始まったものではない。三年前に代助が京阪地方へ出立する平岡を見送りにゆき、「其眼鏡の裏には得意の色が羨ましい位動いた」のを見て、「急に此友達を憎らしく思つ」てからというものずっと鳴り響いているものである。最初のうちは平岡から「絶えず音便があ」るものの、「代助が返事を書くときは、何時でも一種の不安に襲われ」、「たまには我慢するのが厭になつて、途中で返事を已めて仕舞ふ事がある。代助が気持ちよく返事を書けるのは、「平岡の方から、自分（代助）の行為に対して、幾分か感謝の意を表して来る場合」（それから二、311-32）に限られていた。つまり、彼ら二人は離れていても、互いの力関係に拘り合い、嫉妬し合つていたのである。手紙という遠隔交信手段のなかで、覇権争いをしていたようなものである。それが今度は二人の距離が縮まったために、直接、火花を散らすようになったのだ。しかしながら、代助は少なくとも三千代の兄菅沼の存命中は三千代よりも菅沼に、菅沼亡き後も少なくとも物語のある時点、すなわち平岡の消去が始まるまでは、必ずしも友好的ではなかったにせよ三千代よりも平岡に執着していた

はずだ。

帰京後の平岡のこの初めての訪問後、二人で「西洋料理」を食べるが、そこでも上位争いは続く。代助が「夜桜」の話をすると、「世の中へ出ると、中々それ所ぢやない」と暗に相手の無経験を上から見た様な事を云（それから二、34-35 傍点 強調は宮本）う平岡。そこから、「麵麩に関係した経験は、切実かも知れないが、要するに劣等だよ」（それから二、37）と代助が言い、「何時迄もさう云ふ世界に住んでゐられ、ば結構さ」（それから二、38）と平岡が切り返す。以後、「経験」を傘に 着て「代助を子供視」（それから二、43）し続ける平岡と、「職業の為に汚されない内容の多い時間を有する、上等人間と自分を考へ」（それから三、62）る代助の傲慢な自尊心の鏝迫り合いが繰返される。この対立の狭間でこそ代助にとって三千代の存在が浮上する。引越の準備をする三千代が「友禪の長襦袢をさらりと出して」（それから五、108）いるのを代助が見て、おそらくは石原千秋が指摘するように待合に行くのは、三千代の傍らに平岡がいたからであり、また引越後の平岡の家を代助が訪れたときに、三千代が「次の部屋で筆筒の環をかたかた鳴らしてゐた」（それから六、146）こと、大きな行李の「中から綺麗な長襦袢の袖が半分出か、つてゐた」（それから六、146-147）ことに彼が気づくのも、さらに彼が「行李と長襦袢と時々行李の中へ落ちる織い手を見てゐた」（それから六、1

47）ことも、すべて平岡の存在が彼を刺激しているからだ。

こうしたときの平岡は「襟衣も股引も着けずに」「胡坐をか」き、「襟を正しく合せないので、胸毛が少し出てる」（それから六、147）。代助が絶対に見せないような姿、態度であり、「女がお白粉を付ける時の手付」（それから一、10）で朝の身繕いをする代助と対極にあるような男臭さを漂わせている。いかにも男性的な平岡の存在があつてこそ、三千代は女性としての意味を代助に訴える。菅沼がどのような男性であつたについてテクストは寡黙であるが、それでも菅沼が代助を「趣味の人」として尊重し、「（趣味について）深い話になると、正直に分らないと自白して、余計な議論を避け」（それから十四、410）る人柄であつた。ここから菅沼兄妹との「三巴」において、代助を頂点とする三角形が成立し、兄妹から尊敬される代助の男性としての沽券が担保されていたことが分る。「趣味の人」代助の男性性を脅かすものにはない。代助は菅沼が健在ならば三千代に関心がなかつたように、男という記号を発信する平岡が三千代の夫でないならば、つまり自分の男性性が脅かされる危機を覚えることがなければ、敢えて彼女を奪う必要はなかつた。しかし、男らしさを誇る平岡が代助を「子供視」するのであれば、父の得に反抗する以上に平岡と戦い、男性性を勝ち取らなければならぬ。代助が男として平岡に勝つには、彼が所有する女を奪うことを以つて他にない。彼が一人前の男で

あることを証明するためにこそ三千代を平岡の手から奪うことが必要なのである。つまり、三千代に絶対的な価値があるわけではない。平岡との戦いのトロフィーとして三千代があるのだ。

それでは平岡にとって三千代はどのような価値を持ちうるだろうか。代助から周旋された三千代を京阪地方に連れて行き、子供を産ませ、一家の父として君臨することが失敗に終わった平岡にとって、もはや愛してない三千代とは何であろうか。

平岡が代助に彼女を奪われることを潔しとしなかったのは彼女自身への愛情や執着からではない。彼女の獲得が代助にとってトロフィーの獲得であることを意識していたからだ。代助に男として負けることが許せなかったからである。平岡が代助から「三千代さんを呉れないか」と請われ、「うん遣ろう」（それから十六、484）と答えた翌日、血相を変えた兄が平岡の密告状を持って代助を訪れ、勘当を言い渡す運びになったのも、「茲通した妻とその相手はともに夫が殺すのが当然⁽²⁹⁾」であったのを口実に、おそらくは平岡が代助の父と兄を強請つたのであるという佐々木の推測⁽³⁰⁾が正しいとしても、金銭の獲得が第一の目的ではあるまい。また、長井家から勘当された代助が困窮するようにという復讐が第一の目的でもあるまい。彼の脅迫の最大の目的は三千代と代助と自身が意に反して形成してしまった三角形の破壊であろう。平岡は長井家を脅迫することで、三千

代を金銭との交換価値に貶め、自身と長井家と三千代で新たな三角形を形成し、そこから代助を外したのである。そうすることで、自身と長井家という成人男性間での女と金銭の交換を成立させ、代助を交渉相手に値しない「子供」として外したのである。平岡から見れば、女を奪われたにせよ成人男性としての金券は守り通したということになる。

この間の代助の行動はあまりにも稚拙である。彼は平岡の「うん遣ろう」という言葉に疑いを持たなかった。そればかりか、代助の恋愛相手が三千代であるということはまだ知らされていない、嫂の梅子から「例月分」の生活費と手紙を受け取り、翌日早々、古本屋を訪れ、予定していた本の売却を断るという能天気ぶりだ。そうして古本屋から戻ってきたところを、平岡の手紙を携えた兄に不意打ちされ、「おれも、もう逢はんから」（それから十七、499）と勘当されてしまうのだ。女を手に入れたとはいえ彼女の生死も定かではなく、生活力ない子供である代助にできるのは狂気のように町の赤い色のなかに飛び込んでゆくことしかない。

平岡や代助のように生活の不安に晒されていない、まだ大人になりきらない学生時代の「先生」は大人になるために「K」を巻き添えにして、「お嬢さん」との三角形を無理矢理作り上げ、男性として「K」に勝とうと急いだばかりに、「K」を死なせて

しまった。大学を卒業後も幸い、働く必要に迫られない「先生」は男性同士が競い合う社会に入ってゆくことから身を引き、ひっそりと暮らしているが、そこに青年の「私」がやってくる。青年が「先生」の「奥さん」と結ばれ、子供を生すであろう、という小森陽一の刺激的な推測はおそらく正しいであろう。また、「先生の「人生」が決して先生一人のものではなく、静のものでもあったこと」「解った」時、「青年は尊敬する先生を乗り越えたことになり」、「先生」の禁止を破り、遺書を公開して「象徴的なレベルでの「父親殺し」をなすとげ、「大人」になった」という石原千秋の解説には非の打ちどころがない。それでも、最後まで安心して言い切ることができないことがどうしても一つ残る。青年は「奥さん」を愛していたのか、ということである。

「先生」と「奥さん」と青年の間に三角形を作ろうとしていたのは「奥さん」であつたと思われこそすれ、青年であつたという確信が持てない。すでに引用した部分で、「先生」と「奥さん」の会話を傍聴している格好の青年に「ことさらに」同意を求め「奥さん」のまなざし、また着物を繕ってくれる「奥さん」のやさしい手つきが青年の「心臓を動か」したことは間違いない。もしかしたら、青年は「奥さん」に言語動作によって気持を伝えたことがあつたかもしれない。けれどもテキストにおいて、「先生」が旅行先の房州で「K」を前にして不在の「お

嬢さん」を思うように、青年が「奥さん」だけを心に思い浮かべることはない。父の病気のために帰郷する汽車の中で「父が居なくなったあとの母を想像し」てから、青年は「先生夫婦の事を想ひ浮べ」、彼らの「会話を憶ひ出」す。

『何つちが先へ死ぬだらう』

私は其晩先生と奥さんの間に起つた疑問をひとり口の内で繰返して見た。そうして此疑問には誰も自信をもつて答へる事が出来ないのだと思つた。然し何方が先に死ぬと判然分つてゐたならば、先生は何うするだらう。奥さんは何うするだらう。先生も奥さんも、今のやうな態度であるより外に仕方がないだらうと思つた。(死に近づきつゝある父を国元に控へながら、此私が何うする事も出来ないやうに)。私は人間を果敢ないものに観じた。人間の何うする事も出来ない持つて生れた輕薄を、果敢ないものに観じた。(心上 三十六、128-129 傍点強調は宮本)

車中で青年の心をよぎるのは「先生」であり「奥さん」であり、「私」自身であり、この三人を総括する「人間」である。彼の思考のなかで「奥さんは何するだらう」という疑問だけが特権的だとは思われない。

さらに、実家に戻つた青年は、父が母に向つて「おれが死んだら、お前は何うする、一人で此家に居る気かなんて」という言葉を母から聞かされ、「急に父が居なくなつて母一人が取り残

された時の、古い田舎家を想像し」、その後で、「先生の注意―父の丈夫でゐるうちに、分けて貰ふものは、分けて貰つて置けといふ注意を、偶然思ひ出」(心中三、136) だけであり、「奥さん」を思うことはない。じつさい、青年は東京を離れた実家で何度も「先生」のことを思う。「先生を忘れな」い青年は「原稿紙へ細字で三枚ばかり国へ帰つてから以後の自分といふやうなものを題目にして書き綴つたのを送る事にした」(心中四、141) 、「先生」からの便りがなく、「淋し」(心中四、142) がる。自分のことを「先生」に良く知ってもらいたいと願う青年は「自分の生れた此古い家を、先生に見せたくもあつた。又先生に見せるのが恥づかしくもあつた」(心六、146)。また青年は死を控えた自分の父親については「殆んど父の凡てを知り尽くしてゐた」と書く一方で、「先生の多くはまだ私に解つてゐなかつた。話すと約束された其人の過去もまだ聞く機会を得ずにゐた。要するに先生は私にとつて薄暗かつた。私は是非とも其処を通り越して、明るい所迄行かなければ気が済まなかつた。先生と関係の絶えるのは私にとつて大きな苦痛であつた」(心九、157) と書いている。父親との別れのよりも「先生」との別れの方が辛いと言わんばかりである。

青年はたしかに先生の死を怖れている。『おれが死んだら、どうかお母さんを大事にして遣つてくれ』という父親の言葉を聞いた青年は、また、「先生」に思いを馳せる。「東京を立つ時、

先生が奥さんに向つて何遍もそれ(『おれが死んだら』という言葉)を繰返したのは、私が卒業した日の晩の事であつた。私は笑ひを帯びた先生の顔と、縁起でもない耳を塞いだ奥さんの様子とを懐ひ出した」(心中十、162-163)。青年は父の死を思う度に「先生」のことを思うと言つてもよいほどだ。「一方に父の病気を考へた。父の死んだ後の事を想像した。さうして夫と同時に、先生の事を一方に思ひ浮べた。私は此不快な心持の両端に、地位、教育、性格の全然異なつた二人の面影を眺めた」(心中十一、165)。これはまるで、学生時代の「先生」が「K」を前にして不在の「お嬢さん」を思うのと同じパターンである。

ちやうど乃木大将の死んだときに、青年は「先生」から電報を受け取り、そこには「一寸会ひたいが来られるかといふ意味が簡単に書いてあ」(心十三、170) だが、父親が危篤のために郷里を離れることができない。父親がいよいよ悪くなつた頃、青年は「先生」から「書留」(心中十七、185) の遺書を受け取る。父親の病床に縛られている青年に、これが遺書であることをすぐに知る余裕はない。それでも、『此手紙があなたの手に落ちる頃には、私はもう此世には居ないでせう。とくに死んでゐるでせう』という「結末に近い一句」を読んで初めて、この手紙の異様な厚さの意味を理解する。青年が拘るのはもはや、「先生の過去、かつて先生が私に話さうと約束した薄暗いその過

去」などではない。「たゞ先生の安否だけであった」(心中十八、190)。そうして、青年は「停車場の壁へ紙片を宛てがつて、其上から鉛筆で母と兄あてで手紙を書き、「思ひ切つた勢いで東京行きの汽車に飛び乗つてしま」(心中十八、192)うのだ。小森陽一の言うとおり、たしかに青年は「臨終近い父を捨て、「先生」のもとへはしる」。しかし、「たった一人残された「奥さん」のもとへはしることになる」とまでは書かれていない。小森の読みが不可能であるとは言うまい。しかし、少なくとも実家に戻った青年の態度から、わたしには結論を出すことができない。東京に戻った青年が「奥さん」と結ばれ、『天罰』(心上八、32)のために「先生」との間には子供を生すことになかった「奥さん」との間に子供を作る、ということとはたしかに「先生」のできなかったことをして「先生」を超える青年という美しい道筋を引くことができる。しかし、わたしが『心』中のうちに読むのは、ひたすら「先生」に捧げられた青年の熱い思いである。まるで恋愛の対象であるかのように、不在の「先生」が青年の心をいつそう惹きつける。青年が「奥さん」と結ばれたのだとすれば、彼女への愛情というよりも、むしろ「先生」への思いが彼を結びつけたのだと思われるほどである。そうすることで、「私の心臓を立割つて、温かく流れる血潮を啜らう」とする青年に「私の鼓動が停つた時、あなたの胸に新しい命が宿る事が出来るなら満足です」(心下三、199)と書く先生の

熱い思いを受けとめ、実現しているように思われる。「先生」の過去が明らかになり、「先生の遺書の意味が「解つた」時」、青年はもやはこの世の人ではない「先生」と「男同士の究極的な絆を結」び、その「男性性」を「確かなものに」したのではないか。こうした乗り越えを青年に「遺書」を与えて可能にさせることによって、社会から身を引いていた「先生」は自分が生きた印を社会に刻みつけることができたのではないだろうか。この「男同士の究極的な絆」に比べると、男と女の間には結ばれる絆は甚だ儂く心もとないものである。

注

- (1) 夏目漱石『心』、漱石文学全注釈12、若草書房、二〇〇〇年、以下、漢数字を章、算用数字をページ数とする。
- (2) 夏目漱石『それから』、漱石文学全注釈8、若草書房、二〇〇〇年、以下、漢数字を章、算用数字をページ数とする。
- (3) 宮本陽子、「再現の昔——『それから』におけるロマンの(再)創出——」、『広島女学院大学論集』第五十三集、125—140、二〇〇三年
- (4) 宮本陽子、前掲論文
- (5) 宮本陽子、前掲論文、132
- (6) 小森陽一「『心』における反転する〈手記〉」、『構造としての語り』、新曜社、一九九二年、429
- (7) 藤井淑偵、『心』、漱石文学全注釈12、若草書房、二〇〇〇年、下二十三、269、註
- (8) 石原千秋『『ころ』大人になれなかつた先生』、みすず書房、二〇〇五年、152

- (9) 石原千秋、前掲書、同ページ
 (10) 心上二十一、75
 (11) 前掲書、中七、152
 (12) 小森陽一、前掲書。石原千秋、前掲書、120
 (13) 小森陽一「『心』における反転する〈手記〉」、『構造としての語り』、新曜社、一九九二年、429、傍点強調は小森。
 (14) 石原千秋、「『ころ』大人になれなかつた先生」、みすず書房、二〇〇五年、97
 (15) 石原千秋、前掲書、98
 (16) 石原千秋、前掲書、98-99、傍点強調は石原。
 (17) Rene Girard, *Mensonge romanesque et Verite romanesque*, Edition Bernard Grasset, 1961.
 (18) 宮本陽子、前掲論文
 (19) 夏目漱石『それから』、十三、372
 (20) 宮本陽子、前掲論文、130
 (21) それから十四、410
 (22) 島田雅彦『漱石を書く』、岩波書店、一九九三年、113
 (23) 小森陽一、前掲書、436-437
 (24) 小森陽一、前掲書、435-436
 (25) イヴ・セジウィック『男同士の絆』名古屋大学出版会、二〇〇一年、76
 (26) 中山和子「それから」——〈自然の昔〉とは何か——『国文学』解
 釈と教材の研究、一九九一年一月号、64-66
 (27) 佐々木秀昭『それから』、註26-27
 (28) 石原千秋『反転する漱石』、青土社、一九九七年、233
 (29) 佐々木秀昭『それから』注釈、十六、485
 (30) 佐々木秀昭、前掲書、注釈、十七、494
 (31) 石原千秋『ころ』大人になれなかつた先生、120
 (32) 小森陽一、前掲書、427
 (33) 石原千秋、前掲書、120
 (34) イヴ・セジウィック、前掲書、76

S'entremettre pour offrir une femme à son ami
—dans 《Et puis》 et 《Le Pauvre cœur des hommes》—

Yoko MIYAMOTO

Abstract

Dans les deux romans de Soseki NATSUME, 《Et Puis》 et 《Le Pauvre cœur des hommes》, les héros, curieusement, aiment s'entremettre pour offrir une femme à leur meilleur ami. Après avoir entendu les confidences de Hiraoka et l'espoir que ce dernier entretenait d'épouser Michiyo, trois ans auparavant, Daisuke, héros de 《Et puis》, fait son possible pour que ce mariage s'accomplisse. Michiyo est la sœur cadette de Suganuma, son ami intime, qui vient de mourir, et qui souhaitait peut-être le mariage de Daisuke avec cette fille, laquelle l'aimait probablement. Mais Daisuke était alors complètement indifférent à Michiyo. Hiraoka quitte Tokyo pour travailler et habiter dans la région de Keihan. Quand Daisuke se rend à la gare pour souhaiter bon voyage à Hiraoka, et qu'il le voit fier et satisfait de lui, il éprouve de la jalousie et du dépit envers son ami. Hiraoka et Michiyo ont eu un enfant, qui est mort rapidement. Hiraoka a perdu son emploi, puis est revenu à Tokyo avec sa femme Michiyo. Hiraoka se retrouve dès lors sans argent, sans emploi; il emprunte de l'argent à Daisuke et lui réclame un travail. Cependant, il fait peu de cas de son ami, qui n'a aucune expérience professionnelle, qui ignore ce que signifie gagner de l'argent. Plus les relations entre les deux amis se refroidissent, plus Daisuke s'intéresse à la pauvre Michiyo, malade, qui a perdu son enfant, qui est délaissée par Hiraoka. Lorsque Hiraoka manifeste son mépris extrême pour Daisuke, ce dernier veut posséder Michiyo, parce que ravir cette femme à son époux légitime sera la preuve de sa virilité. Comment Hiraoka pourrait-il consentir à cette humiliation? Il rédige une lettre de dénonciation et la transmet à Toku Nagai, père, et à Seiichi, frère aîné de Daisuke. Grâce à cette lettre, Hiraoka veut leur extorquer de l'argent, mais ce qu'il désire avant tout, c'est construire une relation triangulaire, comme l'explicitent René Girard ou Eve Sedgwick; une relation bâtie entre lui-même, Toku ou Seiichi Nagai, et enfin Michiyo. Une relation fondée sur l'échange d'une femme, Michiyo, contre de l'argent. Une relation dont il exclut Daisuke, considéré comme un enfant, qui ne peut donc pas faire partie de cet échange conclu entre hommes adultes.

Lorsqu'il était jeune, "Sensei" dans 《Le pauvre cœur des hommes》, a également invité "K", son ami intime, à le rejoindre dans la pension de famille où la maîtresse de maison et sa jeune fille entretiennent des relations d'amitié avec lui. "Sensei", qui respecte "K", un étudiant brillant, jeune homme à la volonté affirmée, mais qui mène une existence solitaire et misérable, prétend qu'il veut faire connaître à "K" la joie de vivre dans cette pension de famille, illuminée par la présence des deux femmes. Mais au fond, ce qu'il veut, avec "K" à ses côtés, c'est considérer le jeune homme comme un rival, et en affichant son amitié pour la jeune fille, s'exciter les sentiments amoureux de cette dernière. Cependant, après avoir épanché le trop-plein de son cœur auprès de la jeune fille, "K" se suicide brusquement. "Sensei" épouse la jeune fille, mais mène une vie triste et retirée. Apparaît alors un jeune homme, attiré par l'homme mûr que représente "Sensei", qui commence à fréquenter le couple. Ce jeune homme veut connaître "Sensei", il veut le comprendre totalement et

foncièrement. Non pas pour en faire un objet d'étude scientifique, mais pour l'aimer du fond du cœur. Pendant le jeune homme se rend chez ses parents, loin de Tokyo, pour assister son père mourant, "Sensei" se suicide à Tokyo pour suivre l'exemple de "K". Il laisse au jeune homme un testament pour lui faire hériter son sang et faire advenir en lui une nouvelle vie. Le jeune homme accomplit le vœu de "Sensei"; il se mariera sans doute avec la veuve de "Sensei" quand il aura compris le mystère de sa personnalité.

Dans ces deux romans de Soseki, si les héros masculins aiment les femmes et se marient, c'est avant tout parce qu'ils veulent justifier leur virilité; dans cette société de Meiji, totalement dominée par des modèles masculins, il est pour eux indispensable de s'affirmer comme des hommes.